

1924年5月6日

フルトヴェングラー（38歳）指揮／ベルリン・フィル

ハイドン、交響曲第94番 ト長調「驚愕」

バッハ、ブランデンブルク協奏曲第5番 ニ長調（ピアノ、フルトヴェングラー）

ベートーヴェン、交響曲第5番 ハ短調

小宮豊隆（一八八四—一九六六）「断層」（白日書院、一九四六年）

<https://dl.ndl.go.jp/pid/1130078>

（国会図書館デジタルコレクションがインターネットで閲覧可）

ミュンヒェン

一九二四・五・六

奥太利（オーストリア）から獨逸（ドイツ）に這入ると、國境一つ隔てて、人間の感じががらりと違つて来る。奥太利人（と言つても維也納（ウィーン）人しかよく知らないが）は妙に疲れてゐる。或意味では上品だと言へるかも知れないが、兎に角丸で精氣がない。それが、獨逸に這入ると、みんなびちびちしてゐる。奥太利人は既に過去に於てそのドラマを持つて了つた國民である。獨逸人は是から先きも、十分そのドラマを持ち得る國民だといふ氣がする。

ザルツブルクからミュンヒェンに來る途中は、殊にザルツブルクとザルツブルクに近い地方の一體の景色は、非常に美しい。アルプスの岐（わか）れか何かが雪を頂いて遙か遠くの空をヂクザクと割して連なつてゐる前景には、うねうねと柔らかな線を描いて可也な丘が幾重にも重なり、それをあらゆる変化を極めた緑を包む若葉の森が點綴（てんてい）して行く所を、一面の青青した麦畠を隔てて見はるかす景色は、伊太利なぞでは到底見る事の出来ない、朗らかな暢（の）びやかな濃（こま）やかな景色である。獨逸人は、伊太利伊太利と言つて、頻（しき）に伊太利に憧れてゐるが、自然だけに就いて言へば、私には此処の自然に反つて深い味がある様に思はれる。

ミュンヒェンに來てから、汽車は大分長い間、ミュンヒェンの裏側を通る。昔隅田川で明るいうちに船遊びをした時、淺草を裏側から見て、妙に芥溜（ごみため）の中を覗き込む様な感じを受けて以來、不思議に私は、都会を裏側から見る事に興味を持ち出したのであるが、流石の欧羅巴（ヨーロッパ）の都会でも、裏側から見ると、大抵は、汚ならしく不愉快で胸が悪くなる様なものだけである。然るに此所の裏側は、不思議に、小ざつぱりしてゐるのみか、雅な味さえ持つてゐる。——この事が先ず私をミュンヒェンに牽きつけた。

ホテルに落つてから、休養がてら、町の中を好い加減にぶらついて見る。ステーションの近くは小ぎたなくせせこましくざわついて、何となく伯林（ベルリン）の様な感じがあつて厭だつたが、ホテルの近所は、カスターニエンを植え込んだ廣場なぞもあり、家のたたずまいにもしつとりした所があつて、何となく寛ろぎと落つきとを感じる。

廣場の廣告塔を不図（ふと）見ると、伯林の『フィラルモニー』の連中がフルトエングラに率ゐられて、今夜、此所に来て演奏会を催すとある。曲目には、ハイドンの G-dur のシムフォニーがある、バハの E-moll（注：D-dur の間違い）のピアノと弦のコンツェルトがある、最後にベートーフェンの『第五シムフォニー』がある。——急いでホテルに帰つて、番頭に切符を買はせる。

『樂堂（トールハルレ）』に行つて見ると、非常な人である。こんなに人が來るとは予期してゐなかつたのか、携帯品預所には婆さんがたつた一人きりゐない。婆さんは汗みどろになつて働らいてゐるけれども、あとからあとからと客が押し寄せるものだから、仕事がなかなか追いつかない。客は雪崩を打つて前進しようとする。それを別に制止しようとするでもなく、婆さんは、自分の前に差し出される帽子や外套やステッキを、一つ一つ片つ端から始末しては、左手を曲げて顔をこすり上げて、袖の所で汗を拭いてゐる。

ハイドンのものには一體に近代的な神経質な味が多い様に思はれる。このシムフォニーにも同じ味がある。さうして此所には随分綺麗な、たとへばリストかなぞを思い出させる様なパセジが、方方に鏤（ちりば）められてゐる。——ハイドンは、ベートーフェンに比べれば無論人間の味が少ないには違ひないけれども（又ベートーフェンの場合に使う人間といふ言葉とハイドンの場合に使う人間といふ言葉とは多少内容を異にするけれども）、我々の感覚に訴へる訴へ方からいふと、バハなどよりも、ハイドンは遙に人間的だといふ氣がする。バハのものが我々の感覚に訴へる訴へ方には、雅樂や能の囃子や僧のお経などが我々の感覚に訴へる訴へ方と、非常に重要な點で共通する。箇箇には如何なる感情をも表現するものでない様なリズムとメロディーとが相集まつて我々の感覚を刺激してゐる内に、いつのまにか我々は今までとは違つた特別な世界の中に牽き入れられてゐるのである。ハイドンには、然し、さういふ意味でのリズムとメロディーとでなく、もつとハイドン自身の人間に近づいた箇箇のリズムや箇箇のメロディーが多分にある様に思はれる。

バハの『コンツェルト』では、フルトエングラがピアノを弾いた。彼はピアノを弾きながら、左の手を高く上げて、弦の指揮をした。それが私には珍らしくもあれば不愉快でもあつた。いくら馴れてゐるからといつて、あんな事をして本當にピアノが弾ける筈のものではない。それを弾けると思つてゐる心掛が藝術家らしくないと思ふから不愉快なのである。然し段段弾き込んで來るうちに、彼は左手の指揮をやめて了つた。是は弹奏に脂が乗つて來たせもあるかも知れないが、一方では、両手を使わなければならぬパセジが、段段多くなつて來たせもあるであつた。然し、左手の指揮が止むと同時に、今度は彼は、無闇に頭や體を振り動かし始めた。

それが又私を不愉快にした。——然し考へて見ると、若しああまでして弦を指揮しなければならぬのだとすると、それは、氣の毒がられべきではあつても、不愉快がられべき筋合のものではない。たとひあれがフルトヱングラの癖であるとしても、さういふ解釋を容れる余地がある以上、さう解釋する事によつて自分の不愉快を消した方が、此際遙に好都合な事ではないか。さう思つたら、私はそれが少しも氣にならなくなつた。彼が再び左手を上げて指揮しようが、また前よりも一層劇(はげ)しく頭や體を振り動かさうが、そんな事に少しもお構いなく、私は、そこに開展される音の世界の中に、段段と深入りして行く事が出来た。——一方から言へば、それだけバハが偉いのだと言へるかも知れない。聴衆にてんに勝手な事を考へさせて置いて、結局は自分の世界に牽き摺りこんで其所に集中させて了ふからである。考へて見ると、バハのものでは、私はよくかういふ經驗をしてゐる様である。初め暫くの間は、なかなかその世界に這入れない。然し時が経つうちに、いつの間にか、違つた世界に這入つて了つてゐる。

ベートーフェンの『第五』は、フルトヱングラが一生懸命に指揮した割りには、圓盤で親しんでいるニキッシュのそれほど、纏まつた味が出なかつた様である。是はフルトヱングラが豊富な感情の持主であるにも拘わらず、その豊富な感情を制御し整理する事によつて、必要に応じて自由に自分の解釋の上に強調を與(あた)へる事が出来るほど、まだ十分に理知的になつてゐない爲ではないかと思はれる。ニキッシュのものを聴いてゐると、全體に與へられた抑揚緩急が如何にも自由で、従つてあの『第五』の中に盛られてゐる筈の感情が、何所にも曖昧模糊がなく、条理を悉(ことごとく)して透明に我我の頭に這入つて来る。少くともニキッシュは『第五』を支配してゐる感じである。然るにフルトヱングラは反対に『第五』から支配されてゐる。もつとニキッシュの様に『第五』を支配して了つて可いものであるかどうかは十分問題になり得るには違ひないけれども、兎に角フルトヱングラが『第五』に支配されてゐて、その爲めに、その『第五』が、全體として、ニキッシュの『第五』に劣つてゐるという事だけは争はれない。フルトヱングラにあつては、感情が氾濫する。従つて好い所になると、それは肉薄する様な直接性を帯びて来る。然し一方からは、そのため印象にムラが出来て、鮮不鮮の明暗が際立つて現れて来る。例へば、初めのアレグロの終に近く、重荷を背負されて喘ぎ喘ぎ働いてゐる者があがる最後の呻き声とでも形容したい様な悲痛なパセジには、ニキッシュにも見出されない様な劇しい絶望的な苦悶が表現されてゐたけれども、初めの運命の訪づれと呼ばれるパセジでも、スケルツォ全體でも、また最後の、ワグネルが『リエンツィ』の前奏曲の中で踏襲してゐる、裏に憂鬱を包んで凱歌を奏してでもゐる様なパセジでも、十分なインフュールングのもとに、充分に適切な表現が與へられてゐたとは思はれなかつた。

さうは言ふものの、フルトヱングラ初め、みんなが一所懸命であるのは、実に氣持がよかつた。こんな嚴肅な心持で演奏する管弦樂部を、私は未だ嘗て見た事がない。

今日初めて氣がついた事は、一つの樂器から次の樂器へと順次に音が移つて行く時に、その音の運動が、例へば塀の上をちよろちよると鼠が渡つて行く様に、いかにもスマートに又いか

にも可愛く見える様な氣がするといふ事である。勿論樂人は音を出す爲に腕や手を動かすのだから、一つの樂器から次の樂器へと順次に音が移つて行く場合には、その手や腕の運動の見えるのは當り前である。然し私の音が見え、と感じるのは、結局それから誘はれる錯覺であるには違ひないが、そのみでなく、何か異様なサムシングが別に存在して、弦なら弦の上を、右から左へ左から右へ、ちよろちよろちよろち動いて行く様な氣がして仕様がないのである。さうしてそれが不思議な美しさを持つていると感じられるのである。

私はそれを眺めながら、多くの作曲家の内には、私の如くにこの不思議な美しさを感じて、その美しさの爲めだけに一つの管弦樂曲を作らうと企てた人が、或は一人ぐらいはゐたのではないかと考えて見た。然し今までにそういう事を少しも感じた事がなかつたのだから、誰のどの曲がそれに當て嵌るものなのか、元より見當のつく筈はなかつた。

外に出てみると、びしよびしよ雨が降つてゐる。今朝ホテルの女中が、ミュンヒェンはやつと今日お天氣になりました、今まではそれは厭な天氣が續いていたのですよ、と言つてゐたが、此様子では、まだ天氣が定まらないと見える。——然し若葉はもう到る所に出揃つてゐる。カスターニエンの蕾みも、涎懸（よだれかけ）をかけた様に葉にとりまかれて、すくすくと茶褐色に立つてゐる。